

～旧約聖書を読んで感じること～ (55) 司令官アブネル、イシュ・ボシエトを擁立

逃亡中のダビデはパランの荒野にいましたが、ダビデの下にはサウルに背き、ダビデに従う兵、また、その家族が大きな集団となって共に暮らしていました。ダビデは、サウル王の死後、再びユダの地に戻ることにしました。祈ってヘブロンを町を示され、ダビデたちは一団となってヘブロンに拠点を移しました。ユダの人々はヘブロンでダビデに油を注ぎ、ダビデをユダの王としました。

一方、サウルの従兄弟である司令官アブネルはサウルの子、イシュ・ボシエトを擁立し、マハナインで、ユダ族を除いた全イスラエルの王としました。イシュ・ボシエトはその時 40 歳でした。ここではサウル王家の血統による王権の移譲という形式をとり、イスラエルの、主の前で油を注ぐという、聖別による儀式はなくなっています。イシュ・ボシエトは当時 40 歳で、戦闘にも参加していなかったのですから、体力的に弱い人間であったのかもしれませんが。



ミカルを連れ戻すアブネル

サウル王家とダビデ王家の対立が始まりました。両軍はギブオンで対峙しました。ダビデ王家は司令官ヨアブ、サウル王家はもちろんアブネルです。双方 12 名の戦闘によって勝負をつけることになりました。激しい戦闘が続き、優勢はダビデ側にあり、ついに、アブネルが逃げました。ダビデ側の司令官ヨアブの弟アサエルがアブネルを深追いたため、彼はアブネルによって槍で下腹を突かれ、死にました。そこでアブネルはヨアブに、「いつまで剣の餌食とし合うのか。悲惨な結末になることを知らぬわけではあるまい。いつになったら、兄弟を追うのはやめよ、と兵士に命じるのか。」と呼びかけ、ヨアブは「神は生きておられる。もしお前がそう言い出さなかったなら、兵士は朝までその兄弟を追い続けたことだろう。」

(サム下 2:26)と応じ、休戦となりました。イスラエル同士の戦いですから、にらみ合いの戦いとなったようです。サウル王家ではアブネルが実権を握っていきました。それに不満があったのか、王イシュ・ボシエトはアブネルに「なぜ父の側女と通じたのか」と問い質しました。アブネルは王権をイシュ・ボシエトに移譲するため貢献したのに、些細なことで責めると思ったのか、イシュ・ボシエトに激しく怒り、「わたしは王権をサウルの家から移し、ダビデの王座をダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に打ち立てる。」(サム下 3:10)と叫び、イシュ・ボシエトは返す言葉がありませんでした。

アブネルはダビデに使者を送り、寝返ると告げました。ダビデはアブネルの寝返りの条件に、パルティエルの妻になっていた、サウル王の次女ミカルを連れてくるように命じました。ダビデのもとに元妻のミカルを連れ戻し、アブネルは上機嫌で、イシュ・ボシエトのもとに戻って行こうとした時です。ダビデの司令官ヨアブは「アブネルが、偽って、動静を探りに来たのです」とダビデに告げ、あとを追ってアブネルを連れ戻し、下腹を突いて、弟アサエルの血の報復を果たしました。

後にこれを聞いたダビデはヨアブを責め、偉大な将軍が倒れたと言って、アブネルを悼み、手厚く葬りました。アブネルの裏切りと、彼がヨアブによって暗殺されたことを知ったイシュ・ボシエトは落胆し、全イスラエルも怯えました。そんななか、サウル軍に寄留していた略奪隊の二人が昼寝をしていたイシュ・ボシエトを殺し、首をはね、ダビデのもとに持ってきました。



イシュ・ボシエトの死 ((上・下 Morgan Bible)

ダビデはサウルが油注がれた王であるがゆえに、忠実に仕えてきたので、静かに眠っていたイシュ・ボシエトを殺した、この二人の流血の罪を赦すことはできませんでした。二人は処刑され、ダビデはたった一人の王としてイスラエルに残ったのです。